

のも当時労働運動社にロシアから帰ったばかりの近藤栄三（伊井敬）が居て、この男が軍人に送った文書を不用意にも机の抽出しに入れて居たために、特高警察につきつめられ、白状してしまったので皆がつかまることになったのだった。大杉は労働運動社には近藤が二人いるが一人はバカコン（近藤栄三・伊井敬のこと）だと言っていた。大杉に会って翌日中野に下獄した。

九月一日の大震災は入獄中の事で、正午の食事が済むか済まないかという時刻だった。監房もこわれて皆中庭に出された。ところが意外にも、そこには顔見知りの同志も居た。近頃顔が見えないなと思っていれば、不敬罪でやられたという。どこへ行っても、そう淋しいものではないなと思った。一緒に中庭に出されていた他の囚人等が好意をよせているのか、あるいは頼りにしているのか、いろいろ言い寄って来るのだった。しかしこの際どんな言いがかりをつけられないとも限らないので、それには用心していた。やがてまた元の監房に帰された。

九月十六日の昼頃、監房はいつになく静まりかえっていた。雑役の足音も絶えて、なにか鞭の音や人のうなり声が聞えてくるようだった。何かやっているな、と思った。するとやがて僕の房の戸を荒荒しく開けて、「出る」という。いよいよ来たかなと思った。

牢は中央に事務所があって三方に見通しが利くように延びている。一方の両側に房がずらりと並んでいる。僕はその中央の事務所引っぱり出された。二階から縄が垂れていた。「そこに坐れ。お前は囚人を煽動したな」と言って、手を後ろにまわし、縄を胸の方にかけて、縛り上げて吊した。そしてブチで叩く。さらに水をぶっかける。人間にブチをかけた音を初めて聞いた。まったく狂気の沙汰だ。それから吊り上げた足を下につけると言う。意識が失われていくのをかすかに感じていた。早く意識を失った方が良いと思ひ、わざと足を上げた。頭がぐくりと落ちるようになつた。もう絶息したのか。それにしても廊下を駆け足で走る音がかすかに聞えた。医務局に行つたのか。吊し縄から下されたのか判らなかつた。意識不明で、びしょ濡れのままで房に運ばれていた。もちろん食事どころではなく、そのまま夜になった。

不思議なことが起つた。夢ともつかず、うつともつかぬ中に、まさまざと大杉と野枝が子供を真中にして、僕の足もとに立っているのである。はてな、おかしいこともあればあるものだと思つた。これに理屈をつけようなどとはさらさら思わない。ただこうしことがあつたと、僕は言うだけだ。

それから監獄の方も落付を取戻し、五日ほどして妻の

青木が中野まで面会に来てくれた。四谷から中野まで歩いて来たということである。よく来てくれた。彼女は、外では大変なことが起っていると、少し間を置いて、僕の顔を見ながら、大杉さんと野枝さんがやられたと言つて、うつむくのだった。僕はただ「そうか」と言つただけで、それ以上言う言葉もなかつた。そして彼女の帰りを道心配せずには居られなかつた。

大杉とは警視庁の監房で初めて会い、中野監獄でまぼろしの別れをしたということになる。人間の一生には、変化のあるいろいろのことが起るものだ。

共産党吉隈細胞との戦い

戦後の思い出 151

杉 藤 二 郎

学校設立などで私の評判が良くなるにつれ、共産党細胞（吉隈細胞二百人位の勢力）の連中は、私が少しむたくなり、私の追い出し策を構じ出した。それは、麻生連合の組合長に祭り上げようと言うのだ。麻生連合は、同一資本の麻生の鉱業所、赤坂坑、山内坑、上三緒坑、豆田坑、久原坑（佐賀）丘下坑（長崎）それに吉隈坑の七坑と、芳雄製工所（炭坑用具を作る工場）本社従業員組合、の二職場を総括した上部組織である。間近かに迫

中野監獄を出て、間もなく大杉の追悼会だった。追悼会の日朝、大杉の遺骨は暴漢に持ち去られて、遺骨なしの追悼会だった。しかし遺骨の有無は大して問題ではないようだった。皆は二階にも集っていたが、延島君が会場には憲兵隊が機銃を備えつけるそうだと言う。誰かがピストルには弾が入っているか、頭脳には思想があると言っていた。

あの頃は皆が異状な状態におかれていた。追悼会に参起人として名をつらねていたのは15名位だと思ひが、生き残っているのは、もう三人位でしかない。

りつゝあつた連合会の選挙に臨み、各炭坑各職場に居る共産黨員をして、フラク活動を起し、私を吉隈から連合体へ送り込むことは、彼らの大義名分も立つという処だったろう。私は山を離れる意志もなかつたし、その手には乗るまいと心に決めてもいた。杉藤が連合組合長になるらしいと噂が立ち出した時、稲見榊男が和田尊を伴つて私の処へやって来て「決して山を離れてはいかん。今吉隈から君がはなれたら折角これまで頑張った君の努力

が水泡に帰し、平山坑の如く共産党の指揮下に入れられて仕舞う。彼らはそれが狙いだ。』と、私の意中と同じことを言った。また稲見は『君の代りに僕が連合へ出るように働きかけても良い。』と付け加わえた。そこで三人協議の上、代議員会を開くこととし、その工策を稲見と和田にまかせた。稲見と和田は実質的な勢力者で山の中堅層をつかんで居る。この二人の支持があったからこそ、私の組合長としての運営も大胆に最後まで通せたのである。後日、稲見は連合の副組合長、書記長と頭角を現わして行く。このため共産党細胞は吉隈に於ける勢力拡張を阻止された恨を機関紙「アカハタ」に載せた。その文章は全くのでたらめな中傷記事であった。然かも、吉隈坑所内へ配った「アカハタ」は、その部分を墨で黒く塗りつぶしてあった。私は墨で塗りつぶされていない新聞を、飯塚市に出て手に入れたが、それを見ると「組合を誹謗したり、私が局長におさまる為郵便局設置に動いているとか、幹部のブライベートのことなど」有りもしないことがのつていた。私は平民新聞八二号に「細胞は労働者の敵か味方か」アカハタに抗議する」の見出しで反論した。

炭坑国管と賃金のブル制

が、その機なかなか熟せず、取敢ず炭坑労働組合連合結成準備会を兼ねた、賃金専門委員会を造り、各山からエキスパートが参会した。これに参加した主だった山は、日鉦（日本鉦山労働組合略称・麻生連合が主力）炭連（日鉄）三井三山（田川、三池、山野）全石炭（日炭高松が主力）その他、古河、明治などであった。私は中央委員会の議長をつとめ、炭労初代組合長武藤武雄（常盤炭坑、日鉦系）を選出するまで頑張った。

炭労結成、賃金体系・労働協約・退職金制度規約等制定について、常時研究会並に集会に集った連中は、日炭高松坑水上勉、全石炭から元石、日鉄二瀬坑小椋三次、麻生坑杉藤、日鉦から（日本鉦山労働組合の略、現在の全炭鉦の前身）書記をしていた、城平一憲（現飯塚市の課長級）と重枝琢磨（現在全炭の重鎮）達である。私が高松坑の組合長達と協約や賃金問題などで話合う為に、外出ばかりしていられたのも、正規な代議員会臨時総会の手順を踏み、諒解を得たのは勿論だが、私の為に万全の策を常時心掛け、私の代理として職場委員達と連絡を保っていてくれた、稲見をはじめとする拾指に余る（和田三兄弟、矢野、中島、小林熊男、小林（炭）、細川、東、竹下親子、万座、玉置、達）の強力なメンバーの支持があったからである。それだけに私は、他から得てき

当時、炭坑に働く者にとって、特に労組幹部の関心事は、炭坑国有化の問題であった。国有がどんなか、国家監理がどうなるのか、政治問題には暗い労働者達に、上部組織から流れてくる通達や指令は、全く難解だったし、余程政治に関心ある者以外、組合幹部と雖も理解できなかった。いきおい私は質問の矢面に立たされる身となった。私は思想が異なるので、このことを平易に説明するのに苦労したが、アナキズム的に共有化理論を説明した。炭坑国管理論は社会党政府によって一九四七年九月二十五日国会へ提出されたが、浜田虎造（日鉄二瀬炭坑出身、参議院議員、社会黨員）の、内部からの裏切に逢い、野党の圧力も加わって修正の上、十二月二十日臨時石炭鉱業管理法（三年間の炭鉦国管）が公布された。これによって、大手筋の炭坑も中小の山も同一賃金、所謂、八時間（一方）労働の価を同一とし、全炭坑賃金のブル制実施となった。この時一方坑外夫三五円、坑内夫五〇円という35〃50の基本が出来上った。それにしても、七月四日経済白書発表、続いて五日発表された新物価体系では、一八〇〇円ベースである。それに比較する炭坑の35〃50は、一四四〇円ベースとなり、如何に炭坑労働者の賃金が低く取扱われていたか分る。この賃金ベースを上昇させる為にも、労働組合の大同団結を唱えた私た

た知識を次の代議員会や職場委員会に必ず披露して討議し、それに独自の思考や見解も駆使することにより、組合を運営することが出来た。

炭坑のクラブは料亭

当時、政治家といえども闇買いをしなくては腹を干す時代だった。銀ジャリ（米のめし）の馳走に預かるうという訳でもあるまいが、多くの先生方が、国会報告や視察を口実に、炭坑へ来たものである。形式的な視察を終えると、必ずクラブ（坑員千人以上の大手筋炭坑には必ず有る、料亭と殆ど変らない施設）に落付いて、湯に入り浴衣姿で、大鼓三味線入りの宴会が始まる。お酌女もきれいどころが炭坑には揃えてある。日程の都合で、お泊りになる殿方もある。何しろ街の料亭がまだ立直らない戦後の事で、石炭がダイヤモンド以上に尊い時代だから、権力者とそれに連なる石炭資本家の横暴さは、天下御免といった処だ。こんな炭坑の状態は、朝鮮戦争まで続いた。右にならって労働組合の指導者づらしたボス達も、よく山へ来た。しかし、この方はせいぜいめしに有りつくためである。私は一度、このボス達にこんなことを言ったことがある。あなた達も組合員に話の材料でも持って来て頂きたい。それと、空でも良いから弁当箱を

持つて来ること。そうすればあなた方を先輩として立て、空の弁当箱を充滿させます。』斯様にちよつと強い調子だったので、それ以来、私が組合長任期中はボス達も吉隈坑には、顔を出さなくなった。この中三人の男は、まだ生存し〇〇議員の肩書をつけているので、敢えて姓名を秘す。

選挙期の山は大変だ。ボスターが坑所内いたる処にベタベタ貼られ、総ての候補者が労働組合に挨拶に来る。私は、一々候補者の挨拶を受けるのが厭で、選挙が始まると何時も向う側の診療所で事務をとったり、坑内へ下って、坑員の苦情などを聞いて廻った。

あわや死・坑内で落盤に

私が組合長になったとき、稲見や大野から『坑内へも時々下らないと、坑員から文句を言われるようになる』と注告も受けていたし、自分自身も出来る限り坑内を知っておきたいと思い、坑内巡視日程を組んでいた。私が坑内に下るのは、色々な職種の人と話したり、地質を聞いたり、ボタ石の名を覚えたり、ガスの濃度を計ったり、エアーの強弱を調べたりすることだけではない。私の独学、採鉱冶金を勉強する上にも、また組合長として、働く人との人間関係を深める為にも必要なことであつた。

然し組合の仕事が繁雑になり、日程はよく狂った。或る日、私は小林熊男生産部長を伴い、弥栄坑へ下った。私が切羽のトラフ（石炭を箱まで流す幅六〇センチ位の形の長い鉄板）を向側へ跨ごうとしたとき、後に居た小林が「危い」と大声で叫び私の脊中を突いた。私はトラフの上に倒れると、石炭と一しょに、鉄板の上を一〇m程流された。流れ落ちた処は、空箱が石炭の流れを受けている樋口だった。

私がトラフを跨ぎ向側へ渡っていたら、完全に落盤の下敷になつただろう。これは計画的に誰かが仕組んだワナであつたらしい。一番方の昇坑と入れ違いに私達はその切羽へ入ったのだから、二番方の係員もこの場所の支柱がはずされていることを、気づかない筈はない。だとすれば誰が斯様な殺人にもなり兼ねないイタズラを、寸刻の間に行つたのか、種々調査はされたが不明だった。私もまた、それを深く追求することをやめた。坑内に於ける天井は、坑員の入坑直前は坑内職員によつて点検されるのが普通で、先山も切羽の天井には常に注意を怠らない。この時の落盤は、天井状態から見ても、立ててあつた支柱をはずさない限り、起きる筈のない処であつた。誰が何の為に？ 疑問は何時までも残つたが、だからといって私は坑内巡視をやめなかった。但し単独入坑はひ

かえた。三つの坑口を持つ吉隈坑の坑内を、頭の中に入れようとするのは、所詮、無理とは知り乍らも、採鉱課が発表する採掘企画の書類及び図面を以て、請負単価の一部を決める賃金交渉に列席する私には、坑内を知る必要があつた。それを狙つて用意された落盤と思われる節もあつた。小林は十六才からの炭坑夫で、当時三十三才のベテラン、私の為に熱心に調べ、遂にそのイタズラ者をつかんだらしいが、私が、そのことは忘れるからと取り上げない為、小林個人がその人間を糾明し不問に附した。

組合長再選

一九四八年（昭和二十三年）、規約では組合長を含む総ての役員任期は一年である。私は昨年二月という前任者の残留期間二ヶ月を含む、所謂十四ヶ月の組合長であることを、当選時の総会で確認され、まあまあ十四ヶ月を経た。改選期が来たので、今年も例年通り告示をしたが、三役のどれにも誰も候補者が名乗り出ず総会を開くことになった。職場委員と代議員の一部は代つて居た。総会はその名の如く、全労働者の集会である。私は杉藤方式の総会を試み、過去の形式を改めた。ちよつと異論も出たが、とに角私流で押し通した。第一目的は、私と

末端労働者との意志の疎通を図るため、肩書を持たない者の発言を多く求め、その中から問題点をつかみ、今後の組合運営にプラスしようとの願いがあつた。然し労働者は長い年月口を閉ざされていた関係か、発言者は以外に少なく、予期に反した。結局、私の構想を述べ、反論もなく、組合提出原案を採択し、役員を確認、大会を終了した。私はもう一年留任することゝなった。

たばこをくわえてなぐられた

吉隈炭坑の所在地は桂川町字吉隈であるが、臼井町字飯田との境界で、労働者は主に臼井町の商店街へ出る。そこには特殊飲食店（淫売屋）や映画館が有る。この町は吉隈坑の他に、明治平山坑や笹原炭坑、田籠坑と周辺の炭坑によつて生活している炭坑町である。映画館も臼井館と称し、安いネットの古いフィルムを上映し、若い鉱員達を集めて居た。或る日の夕方のことだ、玉置敷が私の家へ駆け込んで来て、ハハハと荒い息使いの中から『友達が警察へ連れて行かれたから、早く行って貰ひ下してくれ。』と言うのである。何をして検束されたのか聞くと、映画館の中で煙草をくわえたら、まだ火もつけないうちに、『キサマ未成年者のくせに煙草をすうか』と隣席に居た三十才位の男が、くわえた煙草を引つた

った。そして『俺は臼井署の刑事だ。』と言ったそうだ。煙草を引つたられた少年は、玉置敷たちの同級生で十七才。少年が二三文句を言ったのだろう、煩をなぐられ、その場から手錠をはめられて、臼井警察へ拘留されたと言っているのである。また、その刑事という男は、酒をかなりの量飲んでいたらしく、ひどく酒くさかったと言う。このことを聞いて私は、組織下の労働者でもあり、聞き流す訳にもいかないもので、とに角臼井署まで出掛けた。当時は警察法改正に伴い、自治体警察が出来たばかりの時で臼井署も留置場を建設中であつた。検束された少年は、手錠をかけられたまゝ、玄関横の木製ベンチに、神妙に腰を下していた。私は署長面接を申し入れたが、自宅へ帰ったとか返事があいてまいである。奥の方から高笑いが出てくる。私の声は通る声なので、一段と大きな声で署長の自宅を教えよと迫ると、この声を通じたのか、警部と臼井町長の坂本秋次郎が出て来た。その警部が署長だつた。私は警察の言い分を聞いてから釈放要求を出すつもりだったが、先方から『組合長さんに、わざわざ来てもらう程のことはなかったのだ。連れて帰って下さい。』と、とても簡単に片付けようとするので、私は一寸反論したくなり、そこへ腰を下して、じんわりと口火を切った。『青年は手錠をはめられているようにだが、そんな悪いことをしたのですか。私の処へ報告に来た者の話では、何の抵抗

もしなかったのに、大衆の面前でなぐられたり、手錠をかけられたりした。然もその刑事と名乗った人は、酒を飲んでいて足下もしっかりして居なかったと言ふことだ。その点どうなのか、真相をお調べになった上で今猶手錠をかけたままにしておかれたのか。もう一時間近くもたっている。その担当刑事に私は逢いたい。私は警職法など知らないが、軽犯罪法に触れるかどうかはつきりしない者を、いきなり撲るなどということが許されて良いものか署長の見解も聞き度い。』と、私の語気も次第に荒くなった。署長の弁解によると、この日は臼井町の某呉服店へ入った強盗を、二十四時間以内に逮捕した祝と、係員の慰労を兼ねた小宴が刑事の酔を誘つて不始末をしかしたのだから、許してやって下さいと、署長はひたすらわびる一方。そばに居た町長も、横から合槌を打つて私に許してやれよと言うので、私は今後、警察官が斯様な暴力行為をすることのないよう、部下の指導を約束し、少年を連れて帰山した。刑事は、少年をつれて署に着くなり寝てしまったらしい。署長と町長は奥で盃を重ねていたらしく、私の言うことにごもごもごもともと平身低頭で争ひにならなかった。が、当時の自治体警察は、まだまだ軍国時代の流れが残っていた。

次回はい
(暁の表替えとG・H・Q)
(福佐新聞会)
(無政府農園) など

(続く)

野 火

高島 洋詩集

あとがきに「このたび不遜にも詩集を出そうなどと考えまして、過去の作品を整理して見ました。そして発見しましたことは、私自身の不器用さでありました。したがって詩集を出すということは、あらためてそれを自らバクロすることに外ならないということで、苦笑せざるを得ませんでした」と、書いた高島君。向井孝が一高島洋の、イオム同盟に加盟してからの詩の出発は、彼自身のうちにある重たい過去を、忘却によって時効にしてみようでなく、いま現在という時点で、たえず詩によって脊負いなをすところからはじまった、と思われる」と言っている言葉は、この詩集を通読した感想と一致している。秋山清が彼をプロレタリア詩人と言った言葉はどちらも遠いようだ。憎悪を打つつけることを階級意識の高揚だとしたように受けとれるプロ文学の連中とは別な高島君の人の柄が感じられる。彼の詩には風景がある。重たい過去を詩によって脊負いなをしつゝ描かれている。こ

う感じるの、かつてプロ文学の流行した頃、アナキストがなぜ現実を真実に表現しようとしないうで、マルクス主義者と同じように憎悪をぶつつけるような詩ばかり

× × ×

最近リベルテール誌の一読者の許へ韓国の同志から、便りがあり、転送されたので掲載する。ご承知のように韓国は政治状況が厳しく、われわれの主義主張は浸透しがたい風土と思われる。それでもリベタリアンは地に湧く泉のようににじみ出る。これが広く溢れ、韓国民衆に自由と自立の機会になるのを願はずにいられない。

「……私は今、あなたが紹介して下さいた例の教授の兄

さんにあたる人のアパートでこの手紙を書いています。教授とは昨夜話し合いました。状況が状況で仲々自由に動けないそうです。たゞ今月(72年9月)になって、はじめてソウルにリバーティアン・リーグが産ぶ声をあげました。メンバーは30人ですが、若い人は少ないようです。まだ直接コンタクトはとれていませんが、慎重にやるつもりです。

リバーティアン・リーグの人々は、今ウッドコックの本(ペンギン版の「アナキズム」と思われる)を翻訳、出版しています。約束分の翻訳が終り、一〇〇〇部のパンフが売れたそうです。それにクロボトキンの作品集も今月中に出版されますし、グランやハーバート・リードの翻訳も進んでいます。とにかく、彼らは、今、フリーダムやアナキをいかにしてそれと判らないように人手するかに四苦八苦しているようです。」

× × ×

第一回ミニコミ市参加の記

鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春

十月十五日ミニコミセンター主催のミニコミ市に参加した。センターの参加よびかけでは一街頭において民衆の理解と参加を直接よびかけ、みずからの情報を自分で管理・伝達し、さらに強固な運動の輪をつくるため」とあった。東京・新宿の歩行者天国で露天市をやるとの

ことである。さっそくリベルテールとアナキをもつて私はこれに応じた。そうなんだ。アナキズムは何時でもどこでも機会と場所を選ばない。われわれは少数者だから聞えるところなら、自分でやれると判断したらやってみることだ。10時の予定が少し遅れる。それでも参加者はゴザとパンフを抱え紀伊国屋前に何んとなく集ってくる。10時半ごろ主催者側の世話人が店を開いて下さいと言う。各人路上に思い思いの恰好で開店する。大部分ゴザを敷き、お客の見やすい形にパンフを並べる。日常見慣れた露天商のルールは私達の深層意識に根付いているらしく、応援の西塔君、河合君がパンフを前に座ると一かどの店主らしくなる。若い人が立ちどまる。パンフをめくり座りこむ。河合君、チラジを差出し敷物にすゝめる。客は前橋の人とか、自分の出席した会合の話をしてる様子。年配者、婦人、若者達、服装はジーンズ、靴は女性だと木靴の型が物珍しい。12時過ぎ両君に代り私が店に座る。最初の客は三人連れの若い娘さん。座った私の位置からはミニスカートから伸びてた発育のよいおみ足がみえる。彼女達、三人顔寄せあうように相談ごと。相談きまってご下問がある。「おじさんこの中で一番面白いのどれなの?」「さあ...(私困るね。アナキは少々ハイブローだしリベルテールは少女向きではない。でも彼女達がもう少し大人になって読んで貰いたいもの:」

そうねこれがいいですよ。(私はサド著のフランス人上共和主義者になりたければ更に努力を)を指す。この一書は全女性のために書かれた本の一つである。彼女達のひとり小さな小銭入れを出す。「幾らですか」「二五〇円です」「でもそんなにないわ」「じゃ二〇〇円にまけとくよ」彼女達相談する。結局一八〇円しかないと言う。「仕方ないね。いいよ」私の初仕事はこの少女達の買物だった。次ぎにフランス人男性と日本女性が来る。連れの女性は流暢なフランス語だ。何んでもアナキにフランス文献の訳が載っていると説明している。そうでしょう。ブルードンもあればサント・ブーブもあるんです。表紙の絵はバリコミューンですぞ。彼女二冊を取り買って呉れる。メルシーボクウ(大変有難う)私が言う彼女ちよっと驚いた様子。にっこりする。フランス人男性「メルシー」と答え人混みに消える。客はと絶えまた集る。わが隣人は右側が尾瀬の自然破壊を告発するグループで、左がお料理のパンフを売る女性だ。時は流れ、わが店には萩原さん夫妻が参加、アナルコ・サンジカリズムが売れる。

はやばやと陽がかげり、舗道に青黒い陰がひろがる。風もでて隣りのパンフがわが店にころがりこむ。四時閉店の呼びかけがあり、各店をたゝむ。その素早いこと、ものゝ10分で20軒ほどの店がしまわれ、ゴミが煙草の吸殻に至るまで拾いあげられた。わが売上げで六千三百式拾円也。多いとはいえず少いともいえない。

(莫空人) 1次回は11月12日(日曜) 1

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和47年10月15日発行 Vo. III No 11

編集兼発行者 三 浦 精 一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)